震災学習スタディツアー2022 活動報告書

支縁 ～ 他人ごとを「自分ごと」に

敬愛大学

未来へ、君へ。

地域連携センター

（表紙）

宮城県名取市の震災メモリアル公園にある慰霊碑、「芽生えの塔」の前で、お話しを伺う学生たちの姿です。2011年3月11日、当地にはこの慰霊碑と同じ高さ、8.4mの津波が押し寄せました。

この塔は、震災により犠牲になられた方が天に昇っていくイメージ、そして復興に向けた決意を新たにする気持ちを込め、芽が空高く伸びていく姿が、表現されているそうです。

私たちもここで、「語り継ぎ」の使命感を心新たにしました。

表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。

震災学習スタディツアー2022 訪問地写真集

東日本大震災・原子力災害伝承館にて

双葉町で津波を受けて大破した消防車

双葉町に残された原子力広報看板のレプリカ

東日本大震災・原子力災害伝承館

閑上でお話しいただく長沼俊幸さん

震災前から変わらない、名取市閑上の日和山

日和山の上で、お話を伺う学生たち

メモリアル公園で代表献花する学生

震災学習スタディツアー2022 訪問地写真集

南浜でお話しいただく武内宏之さん

高橋正子さんから津波火災の説明を受ける

日和幼稚園で起きたことを真剣に聞く学生たち

福田貴文さんに南浜・門脇をご案内いただく

休館日のため、門脇小学校の見学は外観のみ

ゆりあげプラザの慰霊碑にて

閖上の集会場で思いがけず実現した交流

かわまちてらす閖上から臨む名取川

敬愛大学 震災学習スタディツアー2022
活動報告書

支縁 ～ 他人ごとを「自分ごと」に

Page 1 巻頭言
2 訪問地、行程
4 総括
6 参加学生のレポート
28 参加者一覧

巻頭言

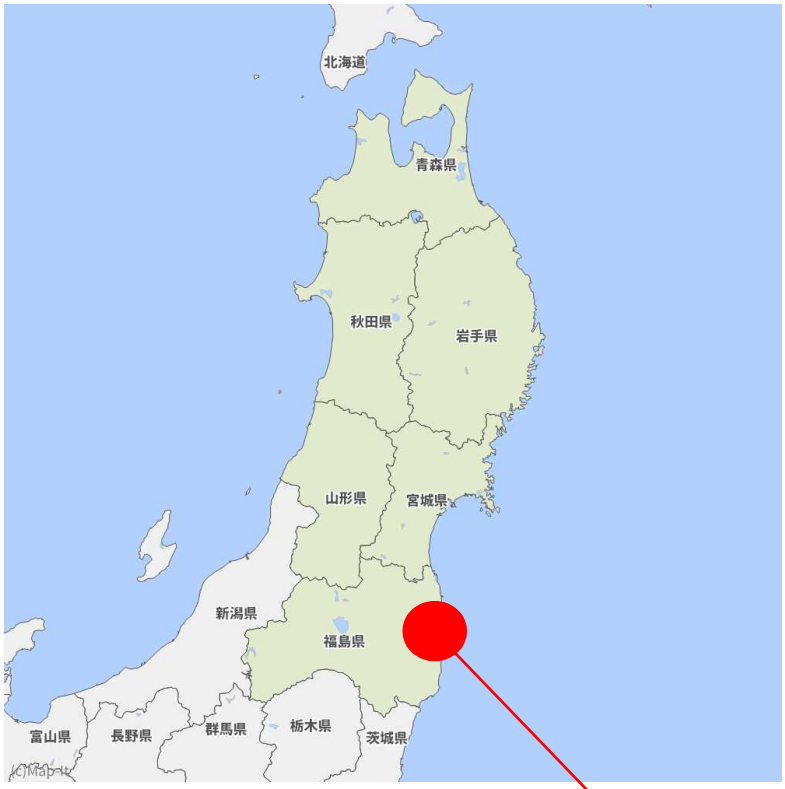
2022年度の宮城での研修は、9月の非常に暑い時期に開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響で2021年度は現地への訪問を断念しただけに、異なる学部学科・学年から手を挙げた22名の学生が、震災被災地での現地学習に参加してくれたことは、高く評価したいと思います。

さて社会のニーズの高まりにいち早く呼応して、本学ではAI・データサイエンス教育を推進しています。近年相次ぐ自然災害においてもまた、データサイエンスにより的確な情報収集や対策が進むことで、被災からの早期復旧・復興の推進や減災に役立てることもできるだろうと考えます。2011年9月から実際に毎年宮城に足を運んで得られた経験や交流、信頼関係もまた、データサイエンスの学びによって深められるのではないかと期待しているところです。

本学の建学の精神「敬天愛人」は「人間は天地自然によって生み出され、生かされている」という西郷南洲隆盛の遺訓に基づくものです。本報告書を執筆したり手に取ったりする皆様が、建学の精神に思いをはせながら、伝承活動を続けていただきたいと願っています。

本報告書の発行にあたり、本学学生が毎年お世話になっている宮城県名取市の皆様をはじめ、今回のスタディツアーの実現にお力添えをいただいた多くの協力者の方々に、改めて感謝申し上げます。

学長　中山 幸夫


北海道
青森県
秋田県
岩手県
山形県
宮城県
新潟県
福島県
富山県
長野県
群馬県
栃木県
茨城県

気仙沼
南三陸
大川小学校
女川
松島
仙台
荒浜
仙台空港
双葉町
石巻市
南浜・門脇地区
名取市
閖上地区

震災学習スタディツアー2022 行程

【1日目】 9月11日（日）

6:45　稲毛駅（イオン稲毛店前） 集合

6:55　出発、千葉北IC～圏央道～友部SA（休憩）を経て、常磐双葉ICまで北上。
常磐線JR双葉駅、再開直後の双葉町役場を車窓から見学。

10:50　**東日本大震災・原子力災害伝承館**
プロローグシアターでの資料映像を拝見後、展示エリアを見学。
双葉町産業交流センター（せんだん亭）で自由昼食。
浪江ICから常磐道を北上、名取ICから閖上地区へ。

14:30　**閖上地区現地踏査① 日和山、震災メモリアル公園**
長沼俊幸さん（閖上中央自治会長、元愛島東部仮設住宅自治会役員）から講話。

16:30　ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動

【2日目】 9月12日（月）

8:00　出発、名取ICから仙台東部道路、三陸道を北上、石巻河南ICから市内へ。

9:30　**石巻現地踏査① 語り部プログラム**
佐藤美香さん（日和幼稚園遺族有志の会）に依頼をしていたが、急なご都合から、武内宏之さん（元石巻日日新聞報道部長）、高橋正子さん（公益社団法人3.11みらいサポート）の案内で、日和幼稚園バスでの出来事などを実地踏査。

12:00　南浜こころの森ガーデンで昼食。

13:00　**石巻現地踏査② 南浜・門脇ツアー**
福田貴文さん（公益社団法人3.11みらいサポート）の案内で、震災前と震災後を比較しながらの街歩き

14:00　**震災伝承交流施設 MEET門脇」**

15:00　**いしのまき元気いちば**

17:00　ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動

【3日目】 9月13日（火）

9:00　出発

9:15　**閖上地区現地踏査②**
ゆりあげプラザ（閖上中学校慰霊碑）～名取市立閖上小中学校～復興公営住宅を踏査、
その後、閖上の記憶、メイプル館、日和山、閖上中央集会所、かわまちてらす閖上などを
自由訪問

13:15　名取市震災復興伝承館駐車場 発
名取ICから、常磐道・圏央道を経て南下。途中、関本PA、友部SAで休憩。

18:15　稲毛駅（イオン稲毛店前） 到着、 解散。

支縁～他人ごとを「自分ごと」に

団長　地域連携センター長 藤森孝幸

2011年度から本学が続けてきた「敬愛大学宮城ボランティア（宮ボラ）」は、震災から満10年を期にそのありかたを見直し、「震災学習スタディツアー」という名称で継続していくこととしました。残念ながらその2021年度は、新型コロナウイルス感染症の急拡大に伴い、2022年2月の催行を断念することとなりました。参加に向けて準備を重ねてきた21名の学生には、やむを得なかったこととは言え、申し訳なく思っています。

私たちの生活は、引き続き新型コロナウイルスに翻弄されているものの東京オリンピック・パラリンピックの成功等を経て、まさに「ウィズ・コロナ」を意識したものとなっています。出発前のPCR検査の集団実施など、考えうる対策を講じて、今夏の「震災学習スタディツアー」が、学生22名の参加を得て催行することができたことに、安堵しているところです。

今年のスタディツアーを行うにあたり、いくつかのキーワードを学生たちに提示しました。それは、「支縁」、「自分ごと」、そして「語り継ぎ」です。とりわけ「語り継ぎ」については、今年度は大学の「敬愛プログラム」にも連動させることで、より多くの方に参加学生たちの見聞を広げることができるものと願っています。

今年度は、一昨年度までのやや慌ただしい行程を見直し、本学がこれまでの取り組みでゆかりのある名取市閖上地区、そしてこれまで復旧工事で通り過ぎることはあっても立ち寄ることができなかった石巻市南浜・門脇地区の2箇所に絞り、時間をかけて現地踏査をすることとしました。閖上も南浜・門脇も、大きな地震と津波で多くの尊い命が失われた場所です。3日間とはいえ、1年に一度の機会ゆえに、様々な「現地」を訪問することをここ数年は続けてきましたが、今年度はそれぞれの地を、時間をかけて歩き、じっくりと学びとることができたように思われます。学生たちからは、石巻市立大川小学校をはじめ、他の場所も訪問したいという要望はありましたが、それはまた来年以降のスタディツアーで検討したいと思いますし、今回の参加を契機に、次は仲間同士や家族と訪れることもできるでしょう。

今回参加してくれた22名の学生たちは、そのほとんどが初めて震災被災地を訪れた若者たちでした。彼らが自らの意思で参加者募集に手を挙げ、自分なりの準備を重ね、実際に五感で体感して考えたことは、6ページから掲載されています。ぜひ時間をかけて、お目通しいただきたいと思います。彼らは正に、「間接的な語り部」の一員です。

ところで、千葉に戻るバスが稲毛につく直前、私は「この3日間は多くの人々との縁でなりたっていたことを、忘れないでほしい。そして様々な形でこの3日間で学んだことを繋ぎ続けてほしい」と伝えています。それこそが、「支縁」であり、「他人ごとを自分ごとにすること」であり、「語り継ぎ」であるからです。あの日、私は大学職員として稲毛キャンパスで勤務していましたが、参加学生たちは小学生だったそうです。このスタディツアーの参加者も、数年後には東日本大震災そのものを直接経験したことがない学生たちになるでしょう。ということは、今夏の彼らの学びは、彼らがこれから会うであろう未来

の若者に伝えていかねばならないことでもあるのです。

この3日間を共にした学生たちはもとより、コロナウイルス感染症への懸念や日程などの都合で参加をすることができなかった学生たちを含め、この報告書を手にされた全ての方が、未だゴールのない東日本大震災の被災地の現状に思いをはせ、また近年頻発している自然災害への備えを考え直してくださることを願ってやみません。

結びに、2019年夏に本学が訪れた宮城県の雄勝でお話しを伺った、佐藤麻紀さんの最近のSNSでの発信を紹介します。

－ ＊ － ＊ － ＊ － ＊ －

震災の時は、みんな　みんな、大切な誰かを亡くしていて、
それも大勢の愛する人たちを亡くしていて、
そんな状況でしたから、
悲しみや痛み苦しさを我慢した人が見えないだけでたくさんいて、
それでも、普段は顔に出さず、
いいえ、もう10年以上過ぎたのにと、そう思われることも知っていますから、
尚更、感づかれないように、そうして生きてきましたよね。
大きな災害で愛する人を喪うと、みんなが同じ状況になってしまって、
誰にも苦しみを吐き出すこともできず、自分の中にしまい込むしかありません。
心に蓋をするのは、とても苦しい作業です。
蓋をしてしまいこんだら、被災後の日常が待っているのですから、
また普通の顔をしなければいけません。
でもそうやって、愛する人を喪った苦しみを抱えて、それでも私たちが生きている意味を、
たった一度でいいから、皆さんご自身に置き換えて、深く考えて欲しいのです。
「そんな苦しい生き方は絶対にしたくない」、そう強く思って欲しいのです。
どうかお願いです。
私達の後悔を、活きたものに変えてください。
災害で命を喪わないという、現実に変えてください。
津波があった日から容赦なく時が流れていきますが、
誰もが大切な人と寄り添って穏やかに暮らせることを、願ってやみません。

（2022年8月4日の投稿）

－ ＊ － ＊ － ＊ － ＊ －

私たちが訪れた場所、伺った話は、どれも被災した街のことだけではありません。私たちが今いる街の「未来図」です。今は災害後ではなく、次の災害の直前に過ぎません。だからこそ、「敬天愛人」を建学の精神とする本学は、これからも宮城県や福島県をはじめとする震災被災地に学び続け、「支縁」、「自分ごと」、そして「語り継ぎ」を続けていく使命があると考えます。

結びに、多くのご縁に改めて感謝と敬意を表します。

震災学習スタディツアーを振り返って

経済学部経済学科 4年 五十嵐優希

大学生活最後の「震災学習スタディツアー」に参加しました。今回で3度目の参加となりましたが、以前訪れた際にお会いしたみなさんとの再会も果たすと同時に、時間をかけて、石巻市南浜・門脇地区や名取市閖上地区の現地踏査を行い、「新しい街」に変わりつつあるからこそ、風化させないための「語り継ぎ」の大切さを学んできました。

『「復興」とは、家や商業施設、街が元通りになることだけではない。「心の復興」も必要ではないか』、と閖上の長沼さんから伺いました。閖上では多くの人が亡くなった理由のひとつに、「津波は来ないもの」という思い込みがあったそうです。90年近く前に建てられていた石碑には、過去の津波の恐ろしさが刻まれてあったのに、誰もがその存在を忘れ、「津波は来ないもの」と思い込んでいたのだそうです。それでは、身を守ることはできません。改めて、日頃から危険意識を持ち、行動していくことが重要だと感じました。

長沼さんからは、災害救助法に関するお話も初めてお聞きしました。この法律では、災害の広域化、長期化を想定がなく、自治体の被災者支援には限界があることから、特に被災地のコミュニティ維持を全面的に支援していくことが重要だと知りました。

2日目の日和幼稚園の園バスについてのお話では、幼いこどもたちが尊い命を落としたことを知りました。「もし大人が正しい判断をしていれば、こどもたちの命は救うことができた」。だから訓練がいかに大切かをいうことを実感しました。そして私たちは、実際に被災地を訪れ、同じような被害を起こさないよう、高い意識を持ち発信していくことが重要だと考えました。

3回目の宮城での活動で知った学びを発信し、多くの人に現実を知ってもらうとともに、決して他人事ではないということを自分で再認識し、継続して発信を続けていきたいと思います。普段からの備えや対策をして、行動に移していきたいです。

私は来春から、航空貨物の仕事に就く予定です。社会人としても、災害への備えを日々意識して仕事に取り組んでいきたいと思います。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した石巻市南浜地区にある「がんばろう!石巻」看板の写真です。この看板は、震災の記憶を伝えていくために5年に1度、新しく作り直されているのだそうです。津波に負けたくない、地域の人を励ましたいという強い思いで設置され、震災を次の世代に伝えていくことの大切さを教えてくれます。

震災学習スタディツアーを振り返って

国際学部こども教育学科 4年 明石隼翔

東日本大震災から11年6か月。今回、震災学習スタディツアーへの参加という機会をいただき、被災地に訪れた。自分の目で被災地を見て、触れて、語り部や住民の方から話を聞かせていただく中で、自分たちが今、何不自由なく生活することができていることは決して当たり前ではないことを痛感した。

被災地にお住まいの方は、津波等の甚大な被害で家族や友人を亡くし、家を流され、心に深い傷を負っている方ばかりで、とても胸が痛くなった。そのうちの一人である長沼さんが、「生きていればなんとかなる」とおっしゃっていたが、本当にその通りだと感じた。「もう津波は来ないだろう」と考えて家に戻ってしまったり、「ここまで津波が来ることは絶対にないはずだ」と考えて避難が遅れてしまったりした方々が、津波の犠牲者に多いことを聞き、絶対に災害を甘く見てはいけないと感じた。大きな災害はいつかまた必ず起こる。だからこそ、「自分の身は自分で守る」という意識を持ち、最悪の事態を常に想定して災害がいつ来てもいいように備えておくことが大切であると感じた。そして、油断や慢心に陥って命を落とすことが絶対にないようにすると自分自身の心に誓いたい。

あわせて、日和幼稚園のバスの事故で園児5人が犠牲になった話は、来年度から小学校教師として働かせていただく自分にとって、とても衝撃だった。「助けられる命が助けられなかった」、これほど無念なことはない。私は児童の安全を一番に考えられる教師になりたいと誓った。また、今回聞かせていただいた話を忘れずに、教師として自分の体験したことを基に、防災教育を児童に伝えていくことが私の使命であると強く感じた。

今回、このような機会を提供していただいたこと、そして私たちのために様々なお話をしていただいた方々への感謝の気持ちを忘れずに、自分にできることは何でもさせていただく思いで、これからの被災地の復興支援に携わらせていただきたい。そして、被災地の復興を心から祈らせていただきたい。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した宮城県石巻市での一枚。震災から1ヶ月経った頃、地元の有志の方がみんなを励ますために建てた看板である。ここであった出来事を忘れてほしくないとの有志の方の強い思いもあり、現在の看板で三代目となる。震災の記憶を後世に伝えていくための大切な場所となっている。

話す、聴く、そして伝える

国際学部こども教育学科 4年 井上光咲

３日間、いろいろな人から話を聴いた。現地の方だけでなく、このツアーに参加した仲間とも震災の日のことを話した。中には、津波がすぐそこまで迫っていたので、車を降りて家の2階に逃げたという話や、地震後お風呂にお湯を溜めたという話があった。特に印象的だったのは、語り部の方から聞いた、門脇小学校の話と避難所での生活についての話である。以下にこの2点について述べる。

門脇小学校には、震災当日1.8mの津波が押し寄せ、津波火災の被害が大きかった。それでも、地震発生後20分後には「訓練通り」に避難を完了させ、在校していた児童、職員は全員無事だったという。私も小学校時代に津波の避難訓練をした。そこでは、「津波てんでんこ」という言葉や少しでも高いところへ逃げることを学んだ。門脇小学校での避難の話を聞き、避難訓練の大切さを強く認識した。しかし、どんなに訓練をしても、大人が間違った判断をすれば命を守ることにはつながらないことを心に留めておかなければならない。教員になってもここで見聞きしたことを忘れず、平時から有事の対応を考えていきたい。

避難所の生活において、段ボールのしきりの効果がとても大きいものだと知った。しかし、役所に段ボールがあっても、職員がその有用性を知らず、使われていなかったこともあったそうだ。災害の後には、多くの人が「こんなものがあったらよかった」、「これは不便だった」という情報を持っていると思う。必ず起こる災害に備え、同じ苦しみを繰り返さないために、前向きな情報も共有していくことが大切だと学んだ。

今の小学校5年生以下の子どもたちは、東日本大震災を体験していない。閖上でお話しをうかがった長沼さんの言葉の中に、「それが次の災害が起きたときにどう活かされるか」というものがあった。語り部ではなくても、大きな被害を受けていなくても、自分が「語り継ぐ」ことはできる。震災を過去の他人事として捉えるのではなく、今度は私が子どもたちに伝える番なのだ。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した石巻市門脇町での写真です。日和幼稚園の園児の乗ったバスが発見された場所を背に、海の方向を見つめました。前を歩く敬愛大学の学生たちは、被災園児の慰霊碑に向かっています。海からはこんなに離れているのに、と言葉にできない思いで包まれました。教員は常に子どもたちの安全を守ることを最優先に考える必要があると教えてくれる一枚です。

震災学習スタディツアーに参加して

経済学部経営学科 3年 伊藤勇輝

3日間の震災学習スタディツアー2022に参加し、震災のこと以上に大切な人を守るためにはどう行動すべきかを考えさせられました。

1日目には、閖上に住む長沼さんから、震災後の経験を伺いました。長沼さんは話の中で、大きな津波が来ると多くの人が思っていなかった、それが被害をあれほど多くした要因だと言っていました。過去にも閖上には津波がきた記録がありましたが、語り継がれることがなかったそうです。この話から過去の出来事を風化させない重要性を学びました。

2日目には、震災により亡くなった佐藤愛梨さんの話を、語り部の方から伺いました。幼稚園生であり、バスに乗っていた時に津波に襲われ、バスの火災に巻き込まれたそうです。幼稚園は元々高台にあったにも関わらず、当時の職員たちの判断ミスで子どもたちを乗せたバスが発車し、結果として子どもたちの命が奪われてしまったのだそうです。とても痛ましく、胸を締め付けられるような感覚がありました。事前準備や避難訓練をしっかり行っていれば違った結果があったかもしれない分、とても悔やまれることです。災害があった時どう行動するかを理解することが、自身ならび周りの人を救うことに繋がると学びました。

3日目は「閖上の記憶」を訪れました。着いてすぐに見せていただいた、閖上の震災直後の動画で、「記憶に支配されるのではなく、記憶を支配することで、人は発展できる」と言われており、1日目と2日目の活動を通してこの言葉は重要だと思いました。被災して生活に苦労したり、友人や家族を失ったり、辛いことがたくさんあっても、今回お会いした方々は皆、未来に震災の教訓を繋ごうとしていました。そういった方々の強さが、この言葉から表されていると感じました。

歴史は繰り返す。大切な人を守るためにどうすればいいのか、その答えの一つは、「継承すること」だと思います。被災者とそうではない人、この両者を繋ぐ橋になり、記録を継承していく。今回の活動を経て、私は「橋」になれる貴重な材料を手に入れました。

〔私の一枚〕

石巻市門脇町の復興祈念公園前にある道路です。横には、津波避難タワーでもある災害公営住宅が建てられています。この道路はただの道路ではなく、公園からは高い位置にあり、将来同じような津波が来ても防げるように、盛り土をして作られているそうです。道路にも津波対策が施されていることに驚かされました。

震災学習スタディツアーに参加して

経済学部経営学科 3年 佐藤由弥

今回私は震災学習スタディツアーに参加して、ネットなどの情報だけではなく、現地に行き当時のことを直接聞くことはとても大切で、考えさせられるものが沢山あったと思えました。ニュースなどで知っていると思っていても、現地に行かないとわからなかったことなどを、お話を伺った皆さんから沢山お聞きし、とても驚く同時に、良い体験だったと思えます。

1日目は、名取市の長沼さんから、当時の状態など詳しくお聞かせいただきました。お話しを聞いた日和山の名取市震災メモリアル公園でも、かつて津波が来たことを伝える石碑があったにも関わらず、石碑の内容を知らず安全と思い込んでしまったことで、避難が遅れた人がいたことを話してくれました。長沼さんの話を聞いていると、次の世代へ伝え続けて行くことがどれだけ大切なことなのかを思い知らされました。

2日目は、幼稚園の避難指示のしかたが的確でなかったことで5人の園児たちが亡くなった話を、語り部の武内宏之さんからうかがいました。やり場のない怒りや悲しみを、強く感じる時間でした。当時の状況を想像すると、とても残酷なことだと思え、聞いていた時は辛くもなりました。予定していた佐藤美香さんから直接うかがったわけではありませんでしたが、同じことを他の場所で繰り返してほしくないという思いを感じました。

3日目は、津波で中学生の息子さんの亡くされた丹野祐子さんを訪ね、息子さんのことや、亡くなられた方へのメッセージを書き入れた鳩風船を毎年3月11日に飛ばしていることなどをお聞きしました。空に上がって行く風船はまるで生きているかのようでした。「息子さんにこうしてあげれば、ああしてあげればよかった、と思っている」ということも沢山お聞きし、思いをしっかりと受けとめてきました。

お話しを伺った方々にはそれぞれの体験があり、辛いことでも伝えていこうという決意、そして同じ思いをしないでほしいという思いを感じることができました。本当にまた同じことがないよう全国の人たちに届いてほしいと心から願います。今回の私の体験も、少しでも周りに話したいと思っています。

〔私の一枚〕

9月11日に訪問した名取市閖上で、私たち敬愛大学の学生が、閖上の長沼俊幸さんから話を聞いている様子です。閖上の日和山や震災メモリアル公園をご案内いただいた後、東屋に車座になり、じっくりとお話を伺いました。

震災を学んで

国際学部こども教育学科 3年 荒木涼那

東日本大震災から11年。初めて現地に足を運び、震災について学んだ。メディアでは知ることのできない、震災当時からこれまでのことを語り部の方々のお話や伝承施設、現地の風景などから詳しく知り、漠然としていた震災でのできごとが鮮明化された。

3日間の中で印象にのこったことが、二つある。

1つ目は、震災当時、津波が6.9m、襲った宮城県石巻市についてだ。地震直後、住民がどのような行動したか見聞きすると、普段から避難訓練を行っていた小学校や保育園、万一を想定していた方や身を守ることを第一に優先した方は、すぐに高台に避難をしている。しかし、多くの方が、高台に逃げることよりも家の様子や家族を迎えに行くことを優先してしまった。また、一度高台に逃げたにも関わらず、物を取りに海に近い家に戻った方もいた。津波の襲来時、ぎりぎりで助かった方もいたが、逃げきることができず、沢山の方が津波に呑みこまれている。共倒れがないように、事前に家族で避難場所を話しておくことや非常用袋を用意しておくこと、そして皆無事だと信じ、自分自身を優先し身を守ることにつながるということだ。

2つ目は、閖上地区に住む長沼さんの話だ。震災当時から避難所、仮設住宅での暮らしなど今に至るまでの体験について伺った。震災直後は、自宅の屋根に上り間一髪で助かったものの、その後は避難所で約2か月、仮設住宅で約5年も生活されたという。想像しただけで、ストレスを感じるほど、毎日過酷な生活を送り続けなければならない状況に息苦しさを感じた。生きるために、相当な苦労や努力をしてきたことが、心に強く感じた。その中「生きていれば、なんとかなる」という長沼さんの言葉に心を動かされた。

この3日間、東日本大震災について多く学んだことにより、他人事が自分事のように感じ、私自身の震災に対する関心が高まった。万一のときどのような判断をするべきか、調べ知識を増やすこと、また当時のことを知らない世代に、私の言葉で伝えていきたい。

〔私の一枚〕

9月12日に門脇小学校上の高台から撮影した海。きれいで心穏やかになるくらい静かな青い海に、苦しみと悲しみ、苛立ちを抱く。震災がくる前、今の私と同じようにこの海を眺めていた人はどんなことを思い浮かべ、考えていたのだろうか。誰だってこの海がこの街を襲う津波になるとは、思っていなかったはずだ。

「他人事」ではない

国際学部こども教育学科 3年 伊東汐里

2011年3月11日、日常を一瞬にして奪ったあの大地震から11年が経った。私は初めて被災地を訪れた。今回のスタディツアーは9月11日から3日間行われたが、初日は月命日ということもあり、たくさんの方が慰霊碑に献花をしに訪れていた。

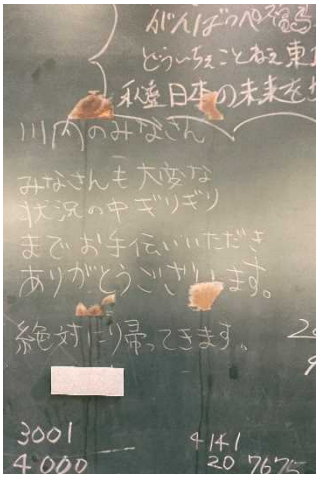
この3日間で最も印象に残ったことは、宮城県名取市閖上地区で被災された長沼俊幸さんのお話を聞いたことだ。お話を聞いた日和山と震災メモリアル公園、またその周辺の町は真新しくとても綺麗で、震災が襲ったとは思えないところだった。しかし長沼さんが見せてくださった写真は衝撃的だった。木や車だけでなく建物すべてが流され、元の町の跡形もないものばかりだった。それが現在は、道路もすべて舗装され綺麗な町になっているのだ。「名前も場所も同じだけど景色が違う」、「日和山に集まるとここだけが元と変わらない景色で、安心し会話も弾む」、こう仰っていた長沼さんの言葉が深く印象に残っている。

このように今回お会いした方々からのお話は、震災当日の記憶や経験を聞かせていただけると思っていた。しかし長沼さんは、普段から震災後の経験に重きを置き、お話をされていると教えてくださった。避難所や仮設住宅での経験、その後現在に至るまで、また自然災害が増えている今、いつ誰が被災者になるかわからない状況だからこそ、学んでおかなければならない大変貴重なお話だった。

この3日間を通して、まるで別世界で他人事だった11年前の出来事が現実であることを思い知らされたと同時に、何か力になりたいけど何もできない自分にもどかしさも感じた。震災を知らない世代を始め、多くの人に語り継いでいくことが今の私にできることであると考える。私の行動が、いつか誰かの命を救うことになると信じ、同じ悲劇を繰り返さないよう改めて語り継いでいかなければならないと胸に刻んだ。

〔私の一枚〕

1日目に訪れた、福島県の「東日本大震災・原子力災害伝承館」に展示されていた、福島県川内村に避難した富岡町民が黒板に残したお礼のメッセージの写真。自分たちも大変ななかで支えてくれた川内村の村民と、どんな状況でも感謝の気持ちを忘れない富岡町民との絆や、お互いを思いやる人間の温かみを感じ胸が熱くなった。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部こども教育学科 3年 菊池七海

東日本大震災が起こって、11年が経った。年月が流れるほど記憶は薄れていくが、近年でも、地震だけでなく台風など様々な自然災害が各地で起こっている。震災時のニュースを見た時は、「自分は被害が少なくてよかった」としか考えていなかったが、今考えると、過去の大震災を人ごとにしてはいけないし、忘れてはいけないことだと強く思った。

今回のスタディツアーで一番印象に残ったのは、石巻でお話を伺った、語り部の竹内さんのお話だ。最初に閖上と石巻の景色を見たときは、とてもきれいなところでいい場所だと感じていたが、お話を聞くと必ずしもそうではなかった。復興が進んでいるのは、目に見える部分だけだと聞き、1日目に長沼さんがお話ししていたように、復興住宅に喜んで入る人はいない理由をさらに理解することができた。

実際に被害が少なかった人たち、なかった人たちからすると、工事が進み、新しく街が作られ、目に見える部分だけで「復興した」と勝手に判断をしていたことを痛感した。年月が経っても、目には見えない被災者の心の復興をこれからどうしていくのかが大切だ、と感じた。現状を知らない人が多くいることから、まず知り、学んだことを伝えていきたいと思った。

原子力発電所はアメリカの設計で、日本で心配される地震や津波を考慮せず、設計がされていたということ。閖上の地では、津波が来ないという言い伝えがあったということ、石巻の地では助かるはずだった多くの命があったということなど、現地を訪れて多くのことを学んだ。どんなに安全だと言われている場所でも、「もしも」を想定して行動できるようにするためには、確実に安全な場所、そこにたどり着くまでの道など、日頃からの防災意識を持たなければいけないと思った。また今回、自分の防災意識の低さを認識した為、将来小学校教員を目指す者として改めようと考えた。そして、同じ過ちを繰り返さないよう、今回のスタディツアーで得た経験を忘れずに多くの人に伝えていきたいと思う。

〔私の一枚〕

9月12日に石巻を訪問した時に、石巻南浜津波復興記念公園の高い丘の上から撮った写真です。きれいに整備された公園で、大きな災害があった場所だったとは思えない場所でした。この堤防を越えて住宅街、保育所、小学校を津波が襲ったとは考えられず、印象に残っています。

震災学習スタディツアーに参加して

国際学部こども教育学科 3年 北嶋優美

2011年3月11日、当時小学3年生だった私は、今でもあの日の事を鮮明に覚えている。テレビにずっと映し出されている大津波警報とその映像を見て、私はその状況を理解できなかったが、怖くてずっと震えていたことを覚えている。それから、11年半が経ち、私は大学3年生になった。なかなか自分たちで被災地に行くことは難しいが、大学主催で東日本大震災について知ることができるならば行こうと思い、今回震災学習スタディツアーに応募した。

3日間を通して本当に沢山のことを学んだが、その中でも一番印象に残っていることは、2日目に行った石巻市での語り部さんのお話である。その場所で何があったのかを語り部の方々のお話を聞きながら、当時の写真を見て門脇・南浜を歩いて回る中で、日和幼稚園で起きたことは想像を絶するものだった。大人の誤った判断で亡くなる必要のなかった幼い命が奪われてしまったというのは、すごく自分の中で考えさせられるものだった。私自身、小学校教諭を目指しているので、自分の命を守ることは当たり前のことだが、大事な子どもを預かっている以上、子どもたちの命を一番に考えることはしっかりと頭に留めておかなければならないと感じた。そして、防災教育の重要性についても理解することができた。私が通っていた小学校、中学校、高校でも避難訓練は毎年行われていたが、喋っている人やふざけている人がいて、あまり真剣さを感じられるものではなかった。だが、今回のスタディツアーを通して、起きてからでは遅い、普段から教師の中でしっかり確認をしておくこと、そして今回のツアーのテーマである「語り継ぐ」ということをしっかり実行していきたいと強く感じた。早速家に帰り、インターネットで東日本大震災についてもう一度振り返ったり、母や友人たちに話したりした。

今回福島と宮城を訪れ、学んだことや心に感じたことを忘れずに、今後生きていきたい。

〔私の一枚〕

3日目に閖上の集会所で地域の方々と交流させていただいた時の1枚。まさか地域の方々とお話できる機会ができるとは思っていなかったので、心がとても温かい気持ちになった。また、「震災で家が流されたので、今はマンションに一人で住んでいる。足が悪くてなかなか部屋から出る機会がなくて寂しい」ということをおっしゃられていた。

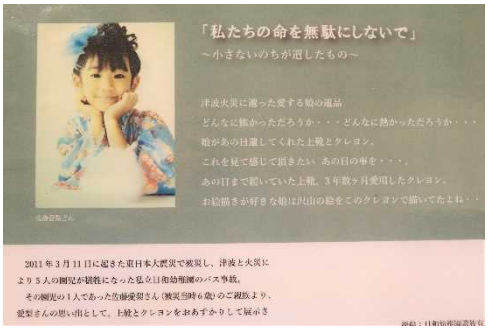
震災学習スタディツアーに参加して

国際学部こども教育学科 3年 後藤沙妃

今回のツアーを通じて、私は「助かる命があったはずだ」ということを痛感した。私自身が小学3年生で経験した東日本大震災はどんな状況だっただろう。驚き、困惑、恐怖、寂しさ、一瞬にして心に沢山の感情が沸き上がり、身体が思うように動かなくなってしまったことを、今でも鮮明に覚えている。今回初めて東北の震災被災地で見聞を重ねて、改めてあの瞬間の教室内の様子をもう一度振り返ると、大人の決断の重さがどれほどのものかを思い知った。

石巻では、多くの子どもたちが避難によって生きぬいたと同時に、失われた命もまた多くあったということがわかった。この二つの違いは何だったのか、「この行動のほうがよかった」とすぐに気が付いたのではないか、と疑問に思った。そして実際の状況を自分に置き換えて想像したときに、自分自身の不安を超えて瞬時に最適な判断を下すことはとても難しいとも思った。それだけでなく、多くの避難者を誘導するということは大変なことだ。「怖い、どうしよう、誰か助けて」と思考停止してしまうかもしれない。混乱した雰囲気にのまれてしまうかもしれない。

しかし、教員は多くの命を背負っているという責任がある。今回聞かせていただいたお話から、避難訓練の大切さを思い知った。万が一を想定するだけでなく、実際に動いてみることで、一人ひとりが初めて意識することができる。災害が起きた時には、「あのときと同じようにすればよい」と思うだけでとても安心することもできるだろう。



今回、多くの方々から伝えていただいた貴重なお話を、これからたくさん生かしていきたい。将来教壇に立った時には、子どもたちに、震災の壮絶さだけでなく、避難訓練などの日頃の「いざというとき」に備えることの大切さを伝え、訓練への意識を変えていきたい。自分の身だけでなく、沢山の子どもたちの小さくも大きな命、保護者の方々の強い思いに胸を張って応えられるよう、責任を持った行動をしようと心に決めた。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した石巻に建てられた、震災時に親元に向かう幼稚園のバスの中で命を落としてしまった子どもたちを悼む慰霊碑です。子どもたちの身長に近い大きさの石のそばには、敬愛大学からの花束とチーバくんのぬいぐるみが添えられています。子どもたちの名前が入った素敵な言葉が彫られており、我が子を失った親御さんの愛情を感じました。

名取市を訪れて考えたこと、これからの使命

経済学部経済学科 2年 小川宏太

津波は何度も来る。

押し寄せる力でさらに津波は高くなり、さらに瓦礫を纏いながら、実に多くのものを流し去っていく。今もまだ過去の不幸に囚われて前に動き出せない人も多くいる。

地震は恐ろしい。

それは物などが上から落ちてくることだけではない。火災や津波など次々に連鎖して、他の災害が起きる可能性がある。日本に住んでいれば当たり前に知っていることであるが、時が経ち、それをその身で体験したことのない「知らない」世代の人間が生まれていくのも、ごく自然なことである。しかし、先人がその身で体験したこと、そしてそこから得られるであろう知識は、知らないままでは良くないし、忘れて風化させてしまうのも間違いである。これから後の「知らない」世代にまで、得たものを教訓として伝えていくことこそ、重要なことである。

令和4年9月、私たちは東日本大震災に見舞われた宮城県名取市を訪れ、閖上という町で住民の方から色々なことを聞き、学びを得ることが出来た。何よりも大切な一つの言葉は、「歴史は繰り返す」だった。自然災害は、発生を抑えることは到底不可能であり、その起こすタイミングはまったく予想できない。いつかまた、あの時の様な大きな地震が起き、黒く禍々しい波が自分達に迫ってくるかもしれない。

だからこそ、あの不幸を味わうことがないように、経験された方々の辛く悲しい経験が繰り返されないように、知らないことで同じような悲しみを経験する人がでないように、知識を得て、知らない世代、興味のない人、他国の人にまで「語り継ぐ」「拡散していく」ことが大切であると、改めて心に刻みつけた。

〔私の一枚〕

9月13日に訪問した名取市立閖上小中学校の隣にある慰霊碑の写真です。これは2011年3月11日の東日本大地震で閖上を襲った大津波により命を落とされ、当時中学生だった方の名前を刻んだ慰霊碑です。黒い御影石に名前を彫ったのには理由があり、東北の地で気温が下がり寒くなっても、慰霊碑の名前を撫でる、自らの手で触ることで温めてあげて欲しいという願いが込められているのだそうです。

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 阿久津結衣

「3.11」。それは私が思っていたより、遥かに恐ろしく悲惨なものだった。

私が住んでいる場所は、山も川も海も周りにない。たとえ地震が起きても土砂崩れや、津波が来るとは思えない。震災が起きた時も、特に大きな被害はなく、災害に対しての意識は低かった。

しかし、閖上で長沼さんのお話を聞いて、私は大きく変わった。長沼さんが住んでいたかつての閖上は、昭和8年に大きな地震で津波が町を襲い、それが記された石碑が公園に設置されていた。昔の人が今の私たちに伝えようとしてくれていたのにも関わらず、なぜか根拠もなく「ここは津波が来ない町だから大丈夫」と伝えられてきてしまったのだそうだ。そして、2011年3月11日14時46分、地震発生。「津波は来ない」、町の人はそう思い込み、救われていたはずの多くの命が犠牲となった。「知らない」「大丈夫だ」ということがどれだけ恐ろしいことか痛感した。

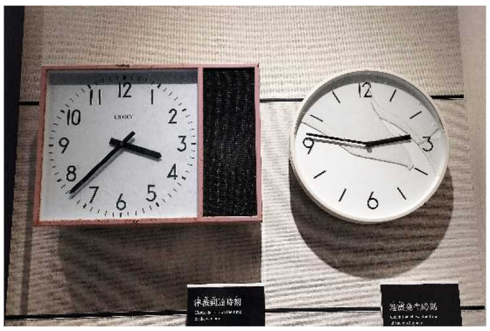
11年経った今、この地震を知っている人、災害に備えている人、語り継いでいる人はどのくらい居るのだろうか。教員を目指している私は、子どもたちのことを一番に考え、冷静な判断ができるようにしていかなければならない。あんなにも大きな地震が来たら、津波が来たら、冷静に対応できるだろうか。うまく判断できず、子どもを亡くしてしまい後悔している人がたくさんいた。瓦礫の撤去、仮設住宅へ訪問することだけがボランティアではない。震災を知らない世代に、悲惨さや恐ろしさ、そして一つしかない命の大切さを、私たちが伝えていくことが使命であり、このスタディツアーに参加した意味となる。

家族や友人、大切な人を失った事実は11年経った今でも変わらない。それでも強く生きて、私たちに伝えてくれた。

そして、それを今度は私たちが生きて、伝えていく。もう二度とこのような思いをする人がいないように。

〔私の一枚〕

時計の針が11年前そのままの時間で止まっている。これを見た時、言葉では言い表せないほど心が痛くなった。この瞬間、誰が地震や津波が来ると予想できたか。災害はいつ起こるかわからない。もしかしたら家族とご飯を食べている時、友達と笑い合っている時、大切な人と幸せな時間を過ごしている時かもしれない。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 伊藤彩花

東日本大震災が起きた3月11日、私は千葉県鋸南町に住んでいた。震源から遠い場所にも関わらず、学校のフェンスが全て倒れていく場面を目にしたり、計画停電を体験したりと、怖い思いをしたことを今でも鮮明に覚えている。東北地方ではそれ以上の被害があったことはもちろん理解していたが、11年経った今でも立入禁止区域が残り、手が付けられていない建物がたくさん並んでいた。

今回、宮城県石巻市や名取市を訪れたが、石巻市では約7m、名取市閖上では8m以上の津波が押し寄せ、津波、津波火災などでたくさんの人が命を失ったそうだ。どの場所にも、その町を飲み込んだ津波の高さと同じ高さのある伝承館などの建物があり、その高さを目の前にして驚きを隠せなかった。

閖上に住んでいる方々が真新しいマンション（災害公営住宅）などで普通の生活ができるようになりよかった、と安心していた。しかし、環境変化によるストレスや不安から亡くなってしまった人、体調を崩してしまう人もいらっしゃるという。これもまた、災害なのだ。

また、震災時に石巻市の高台にあった私立日和幼稚園の子どもたちを親元に返そうと先生方は、子どもたちをバスに乗せて高台から海の方へと下っていったそうだ。しかし、津波が来ることを知り、バスで高台へと戻る途中、津波で押し流された瓦礫に進路を阻まれ、炎の中で子どもたちは亡くなってしまった。この時、バスの運転手は園児を残して高台に逃げたそうだ。私はなぜ子どもたちのことを考え行動できなかったのか、大人なりの行動があったのではないか、と怒りと悲しさが同時に生まれた。お話しによると、日和幼稚園では普段から避難訓練を行っていなかったそうだ。それを聞いて、先生方がどのように動いていいのか混乱してしまったとしたら、善し悪しは別として、当然の結果だったのかもと納得してしまう自分がいた。

今私たちができることは、いつ、どこで災害が発生しても落ち着いて判断できるよう、日頃から準備をしておくこと、また、自分の今回の経験を、広く周囲に伝えていくことであることを学んだ。私たちには南海トラフ地震などが待ち構えている。一人ひとりが心がけることが重要なのだ。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した、石巻南浜津波復興記念公園。自然が好きな私には、広々としていて心地よく、伝承館やカフェも整備されていました。小高い丘を登ると見晴らしが良く、景色は最高でした。しかし大津波が襲ってくる前までは、家がたくさん並んでいた住宅街だったのだそうです。

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 緒形光咲

「3.11」。この日を覚えているだろうか。多くの命や思い出が消えたあの日を。

この三日間を通して、私の中の「ボランティア」の定義が覆されたことが印象に残っている。私の中で「ボランティア」とは、力仕事などで「直接的に援助すること」だと今までは思っていた。もちろんそれもボランティアであるが、被災地の現状や経緯を知り、それを伝えることも「ボランティア」の一つなのだと学んだ。

今回参加してみて、自分が震災を「他人事」として考えていたのだな、と強く実感した。なぜなら、10年以上経った被災地の現状を全く理解しておらず、放射線などの基礎的な知識も不足していたからである。

実際に被災された方のお話を聞いた時、言葉には表せない苦しさ、悲しみから何度も涙が流れそうになった。特に、日和幼稚園のお話は胸が痛くてたまらなかった。伝承館を訪れたり、語り部さんのお話を聞いたりしている中で、自分を犠牲にしてまで人は守らなくてもいいけど、生きるチャンスがあるなら勇気を持って声に出したり、行動をするなりして救いの手を差し伸べてあげられるような強い人間になろうと思った。

もちろん長沼さんたちのように、被災した方が語り継いでいくことは、これから先も大切になってくると思う。一方で私たちのような被災者ではない第三者が、現状を知り語り継ぐことで、いざ災害が起きた時により多くの命が救われるのではないかと考えた。

私は教員を目指しているが、東日本大地震を経験していない子どもたちにも災害の恐ろしさや、「もしも」を考えた避難計画などを立てることの大切さを伝えていきたい。また、家族でも災害があった時にどこにどう避難するのかといった話し合いも進めることができた。

自分の大切な家族、友人を守るためにはもちろん、自分自身、そしてこれから生きていく人たちの未来のためにもこの経験を無駄にはできないと強く感じた貴重な三日間だった。

〔私の一枚〕

震災遺構となっている、石巻市立門脇小学校である。この写真を見ると日和幼稚園の悲しい情景が浮かぶ。小学校教員を目指しているからこそ、門脇小学校のように避難訓練を徹底し、いざという時に救いの手を差し出せる児童を育てていきたいという強い志も、この写真を見ると思い出すことができる。

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 佐藤百華

宮城県。私にとっては、千葉県の次に身近な県である。なぜなら、私の父は宮城県栗原市の出身であり、夏休みは帰省をして、おいしい空気とのんびりとした景色に囲まれて快適な数日間を過ごしていたからだ。

そんな宮城県を、東日本大震災は変えてしまった。私も九十九里浜沿いに住んでいるため、当時は避難をした。一段落すると宮城の実家や当時、宮城県気仙沼市で単身赴任中の伯父が心配になった。実家に被害はあったが、伯父も含め家族は全員無事であった。後に伯父は、「車で避難している時に後ろを見たら、5台後ろはもう流されていた。」と話した。私はあまりの衝撃で黙ってしまったのを覚えている。それを思いだし、今回の震災学習スタディツアーは、自分に何か出来ることはないかという思いで参加した。

2日目の石巻フィールドワークで語り部の高橋さん（3.11みらいサポート）に当時の伯父の話をしたところ、「震災自体のことが記憶にあったとしても、誰かに話せるということはなかなか簡単ではない。私は雨がたくさん降ると思い出してしまうし、3月になると皆さんにこのように話すこともできない」というお話をされた。

最終日、名取市閖上の公民館のお年寄りの集まりに、急遽お邪魔させていただくことになった。1日目に長沼さんから閖上のお話や写真資料で深刻であったと伺っており、過去に伯父の話で言葉を失った私はそのような経験をされた方とお話できる自信がなかった。しかし公民館に入ると、皆さん明るくパワフルで、ゲームで仲良くして頂き、温かさが心に広がった。

帰宅後も色々と考えさせられ、迷路のような思考になった。辛い記憶はあっても、それを思い出せる人と思い出したくない人、言葉に出せる人と出せない人がいるなど、震災に対する思いは違えども、東北は確実に前を向いていることを実感できた。

まだ自分に何ができるか、明確な答えは見つけられていない。だが、これからも東日本大震災への関心を深め、自分なりに後世に伝えていきたいと思う。

〔私の一枚〕

2日目に石巻市南浜の「こころの森ガーデンカフェ」からみた景色です。千葉よりも少し涼しく、海風も気持ちがよかったです。こちらでいただいた石巻焼きそばとイタリアンジェラートは絶品でした。石巻焼きそばは普段食べている焼きそばとは少し変わっています。どんな焼きそばかは行ってからのお楽しみ。この写真で宮城の心地よさが伝われば嬉しいです。

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 池貝美海

今回の2泊3日のスタディツアーを通じて、特に印象に残ったことが、主に2つあります。

1つ目は、語り部の方が話されていた、「避難するときには、『家族や友だちも安全なところに避難しているという信頼を互いに持っていること』が大事」という一言です。このお話を聞かず、家族などと避難場所について話し合っていないときに、もし避難が必要な状況にもしなったら、家や職場などへ行き、避難しているかどうか確認しにいってしまうだろうと思いました。しかし、この一言により、このような行動で津波に巻き込まれ、命を落としてしまう可能性もあることがわかりました。だからこそ、災害時には相手も避難しているという信頼を互いに持っていることが、命を守るうえで大事なことだとわかりました。

2つ目は、事前の準備がどれほど大切かということです。2日目の南浜・門脇ツアーで訪れた、海岸に近い門脇保育所と、日和山の中腹にあった日和幼稚園のお話です。門脇保育所では、災害が起きた時に備え、日和山まで逃げる避難訓練を定期的に行っていて、実際に災害が起きた3月11日当日も日和山に逃げ、津波から逃れたという話を聞きました。一方、日和幼稚園では、防災マニュアルが園全体で共有されておらず、3月11日は大地震直後に海方向へ送迎バスを発車させたり、身動きが取れなくなったバスの中に残っている園児を助けに行かなかったり、と災害に対する準備や対策ができておらず、結果として、助けられるはずの命が助けられなかったというお話を聞きました。この対極的な二つのお話を聞き、避難訓練や防災マニュアルなどの準備が、私たちの命を守るためにどれほど重要なのか思い知らされました。また、「『あの時こうすればよかった』といった沢山の後悔も、十分な準備ができていたら減らせたかもしれない」という言葉も印象に残りました。

この2泊3日で学んだことを活かして、いつ起こるかわからない災害に備えていくとともに、今回学んだことを多くの人に伝えたいと思います。

〔私の一枚〕

9月12日に訪問した、日和幼稚園のバスで亡くなった園児たちの慰霊碑での写真です。彫られているメッセージには、亡くなった子どもたち一人ひとりの名前が詠み込まれています。オブジェの高さは亡くなった子どもたちの平均身長になっていると、語り部の方が教えてくださいました。

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 後藤真咲

2011年3月11日から11年経って初めて被災地に訪れた。11年経った今、被災地には、想像していたよりもはるかに綺麗な街並みが広がっていた。しかし、被災者の方々のお話を聞くと、なかなか癒えない心の傷や、目には見えない悲しさ、いくら街が綺麗になろうと故郷の懐かしさを味わうことが出来ない悔しさなどを感じることができた。もしこの綺麗になった街をテレビなどだけ見ていたら、復興が進み「元通り」の生活に戻っていくと勝手に思い込んでいただろう。生の声を聞き目で見えているものだけが復興とは限らないことを知り、被災者の方々の生活が「元通り」になるにはもっとずっと長い時間が必要だと感じた。

私は小学校の教員を目指しているため、日和幼稚園と門脇小学校での出来事がとても印象に残っている。大人の誤った行動によって失われた命があることを知ると同時に、大人の正しい判断により守られた命があることを知った。教員が子どもたちの命を託される立場として、どのような状況でも子どもの命を最優先に考える責任があることはわかっているが、いざ自分が震災に遭った時、子どもたちを目の前にして冷静な判断を下せるのかを考えると、自分を信じられなくなり、そんな自分が教員になることがとても恐ろしく感じた。犠牲になった命を一つも無駄にしないためにも日ごろからの避難行動の大切さを忘れまい、と心に誓った。

この3日間で被災地を訪れるごとに、これからどのように生きていけば良いのかをひたすら考えていた。石巻の復興記念公園を訪れた際に案内してくださった方の「震災のことを知れば知るほど、もっと広めていくべきことだと感じるようになった」という言葉に、私は大きく共感した。知らなかった11年間と知ってからの今、震災のことや被災地に対する思いは大きく変化し、もっとこの現実を多くの人に知ってほしいと思った。

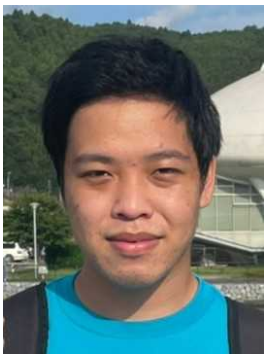
貴重な経験に感謝し、伝えていきたい。

〔私の一枚〕

9月12日に石巻南浜津波復興記念公園の近くの海を撮ったものです。一面に広がる海を見て、この海が多くの命を奪ったのかと思うと、穏やかできれいな景色とは裏腹に、怖くて恐ろしい感情が襲ってきたことをとてもよく覚えています。穏やかなものが、突然奪われることもあると教えてくれました。

「知る」から「伝える」に

国際学部国際学科 2年 山田瑞基



今回のツアーに参加するにあたり、当初とにかく震災や被災地について知ることを目的としていた。新たな視点から大震災を見ることができる、そして自分が知っていなければ伝えることができないと思っていたからだ。

1日目は、福島県双葉町の「東日本大震災・原子力災害伝承館」を訪問した。そこでガイドさんが展示模型を交えた説明を聞いて衝撃だったことが、福島第一原発の非常用電源についてだ。発電機は6号機を除いて全て地下に設置されていたという。津波対策を想定していない構造だったという話に、背筋が凍った。地下にあった理由は、発電所の設計はアメリカが行い、津波ではなくハリケーンを想定していたからというものだった。さらに非常用電源の正常な動作状態を誰も知らなかったという。設計を見直していれば防げていたかもしれない。ここで自分の無知を突き付けられたと同時に、失敗を伝えるということについて考え始めた。

その後の閖上地区で聞いたお話の中で最も印象に残ったのは、災害への意識についてだった。長沼さんや閖上の記憶でのお話でも、当時は「津波は来ない」と信じていた人がとても多かったそうだ。

私は津波のニュースの度に祖母から同じことを話され、自分もそれを信じて周りに話していたことを思い出し、もしかしたら自分も無意識に後世の防災意識を摘み取ってしまっているかもしれないと思いとても怖くなった。それと同時に「知るだけでは駄目だ」と強く思うようになった。

今回のツアーで本当に貴重な体験をさせてもらうことができた。そして得られたものの中で、何よりも伝えていくということがどれだけ大切であるかを理解することができた。「知るだけ」から「知って伝える」へシフトし、同じ悲しみを起こさないよう、少しでもこの体験を伝承していくことが、今を生きている私たちに出来ることなのだと思う。

〔私の一枚〕

名取市震災メモリアル公園にある石碑群です。一番右のものは、昭和三陸地震（1933年3月）についてのもので、「地震があつたら津浪の用心」と刻まれています。東日本大震災の前から立っていた石碑ですが、内容はあまり知られていなかったそうです。この石碑のように、私たちの周りにも先人たちが同じ悲しみを体験しないようにと残してくださったものが、日常の中にあるかもしれません。

話から見えてくる被災地

教育学部こども教育学科 1年 加藤凜花

「被災地の人たちは、津波の恐怖を昔から知っているのだろう」、お話を聞く前はそう思っていた。しかし、閖上地区で話してくださった長沼さんによると、地元の人たちは「閖上は大丈夫」、そう思っていたそうだ。90年前（1933年）に同じように津波が襲来した記録が残っているが、「そんな話は聞いたことがなかった」と。石碑も建っていたのに、語り継がれていなかった。この話はとても衝撃だった。知らないということがどれだけ怖いことなのか、改めて知った。

長沼さんは、奥さんと一緒に家の2階へ逃げたという。さらに迫り来る津波から逃れるため、屋根の上に逃げた。しかし、どうやって屋根に登ったかは覚えていないそうだが、屋根の上で一晩をすごして助かったという。そんな話を聞きながら、自分が立っている場所に津波が押し寄せ、瓦礫だらけだったことは想像出来なかった。とても綺麗に整備された公園で、新しく公営住宅も建ち、人々が元通りの生活を送っている様子を感じたからだ。長沼さんのお話の中で印象に残っていることがある。それは「公営住宅に喜んで戻ってきた人は少ない」という言葉だ。それまで被災地に来て綺麗になった街を見て、「復興したんだ、良かったな」と思っていた。しかしながら、目に見える復興が進んでいても、目に見えない復興があるのだと知った。まだまだ自分には知らなくてはならないことがあるのだと考えさせられた言葉だった。

今回の現地踏査で一番身近に感じたことがある。それは、日和幼稚園のお話だ。話を聞いていくうちに、遺族の方々と同じように「なぜ」が頭の中を駆け巡った。感情的になり、涙も出た。愛莉さんは、震災当時の自分と1歳しか歳が変わらない。春からランドセルを背負うことを楽しみにしていただろう。そう思うと同時に、教員を目指す自分にとって、同じように子どもの命を預かっているはずの幼稚園の対応に腹が立った。自分の行動が感情的なものにならないために、いつか子どもたちを守れるように震災について、もっと学ばなければならないと感じた震災学習スタディツアーだった。

〔私の一枚〕

閖上地区日和山の写真です。長沼さんは、「故郷は新しく綺麗になったが、知らない街のようだ。昔の思い出の場所が無くなるのは寂しい」と仰っていました。それでも、震災前と唯一変わらないのはこの日和山だと。たくさんの葛藤があって、それでも故郷の閖上地区に戻り、震災を語り継ぐ活動をしているのではないかと感じました。

忘れない、語り継ごう

教育学部こども教育学科 1年 村山真菜

東日本大震災から11年がたった今、当時のことを知らない世代も増え、震災の被害の大きさや失ったものの多さ、当時の人々の思いをテレビなどで報道される機会も減ってきている。自然災害は突然起こるものだからこそ、日頃から備えておくことが重要で、防災について「知らない」「この場所は安全だろう」といった関心のなさや油断が危険であるということを、今回のスタディツアーで学んだ。

被害にあった方々の思いを共感し、すべてを受けとめることは難しい。しかし、お互いに支え合うことや、当時の経験や実際にあったことを聞き、多くの人に伝えていくことは出来る。

今回踏査した石巻市内や閖上地区は確かに復興が進み、整備され、新しい建物が立ち並ぶ街並みになっていた。その街並みの中に、避難場所案内の看板や避難マップの載った掲示板、慰霊碑が多くあり「当時の出来事を忘れない、初めて来た人にも知ってほしい」という強い思いが伝わった。

語り部の方のお話の中で「時がたてば悲しみが薄れていくのではなく、時がたち震災前の風景が復興により新しい街並みになることで、昔ながらの街並みがもうここにはない、見ることができないということに寂しさを感じる」とおしゃっていたことが印象深い。

「津波は来ない場所だと信じていた、津波が来ると聞いても『津波ってなんだ』と知識がなかった、家族や家が心配で避難せず戻ってしまった」。こういった理由でより多くの被害が出てしまったということを知り、もしあの時知識があれば、もしあの時戻らなければ…と後悔しないために、「知る」ことは「命を守る」ことにもつながると感じた。

もしまた地震や津波がきたらどう行動するか、どこにどの経路で逃げるか、今確認しよう。備えていれば、知識があれば助かるはずの命は多くあったと気づいた東日本大震災での経験を無駄にしない。活かし、生きていこうと思う。

〔私の一枚〕

地震後の火災で、幼稚園バスの車内で園児達が犠牲になった。全焼したバスのすぐそばに一輪の青い花が咲いていたことから、その花は亡くなった園児の名前から、アイリンブルーと名付けられたそうだ。アイリンブルーをはじめ沢山の花々が植えられた花壇を目にして、「震災当時を忘れてはいけない。命は尊いものだ」というメッセージが強く伝わってきた。毎年春に美しい花を咲かせ、種を持ち、今日も命をつないでいる。

震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科　1年　菅原ひかる

今回の震災学習スタディツアーに参加し、自分が想像していたよりもとても貴重な経験を得られた。ここでは特に印象に残った話をとりあげていきたい。

閖上の長沼さんの話では、閖上では江戸時代に大きな津波が起こったことを記した石碑が残っていたのにも関わらず、現代の人々に津波の被害が語り継がれておらず、東日本大震災のときに大きな被害を受けてしまったこと、長沼さんが当時どんな避難をしたのか、震災後どんな生活をしていたのかを知ることができた。語り継いでいくことの大切さをしみじみ感じることができたのはもちろん、被災後の生活を経て、「災害救助法」という被災者を救済するための法律が、今の生活様式と合っていないという話も非常に興味深かった。

石巻現地踏査では、語り部の方と石巻南浜津波復興祈念公園の周りを歩きながら、11年前にここでどんな被害が起きたのかをすることができた。特に、11年前に津波と火災に巻き込まれて日和幼稚園の園児5人が命を落としてしまったという話がとても悲しかった。街を歩きながら、園児たちの遺体とそのバスが見つかった場所を訪れ、今この地に足を置いている私は火災で焼けて苦しみながら死んでいった小さい子どもたちの遺体を踏んでしまっているのではと感じてしまい、何も話せなくなってしまうくらいショックを受けてしまった。昼食の石巻焼きそばを食べながら、11年経って瓦礫がすべて撤去されてまっさらになった石巻南浜津波復興祈念公園を見て、ここでたくさんの痛みを感じながら亡くなっていった人たちがいたことを多くの人に伝えていかなければ、いつか忘れ去られていくのでは思うと、どこか寂しさを感じた。

私は、夏休みをただアルバイトだけをして終わるより、なにかしら経験を得たいという思いがきっかけで、このツアーに参加した。ほんの些細なきっかけで、機会がなければ一生聞けないような話を聞くことができた。このツアーで聞いた話や感じたことを、誰かに話して語り継いでいきたいと思う。

〔私の一枚〕

9月12日に石巻南浜津波復興祈念公園にある「南浜こころの森」というカフェで撮った写真です。園児が命を落としたという話を聞いて、ショックを受けて心がしんどくなっていたときに、ふと空を見上げると清々しいくらいきれいな青空で、少しだけ元気になった気がしたのでこの写真を撮りました。

敬愛大学 震災学習スタディツアー2022 参加者

（参加学生）

経済学部 経済学科	4年	五十嵐 優希
	2年	小川 宏太
経済学部 経営学科		
	3年	伊藤 勇輝
		佐藤 由弥
国際学部 国際学科	2年	グエン ティ チャ ミー(*)
		山田 瑞基
	1年	菅原 ひかる
国際学部 こども教育学科	4年	明石 隼翔
		井上 光咲
	3年	荒木 涼那
		伊東 汐里
		菊池 七海
		北嶋 優美
		後藤 沙妃
教育学部 こども教育学科		
	2年	阿久津 結衣
		伊藤 彩花
		緒形 光咲
		佐藤 百華
		池貝 美海
		後藤 美咲
	1年	加藤 凜花
		村山 真菜

（学籍番号順）

（引率教職員）

地域連携センター センター長　藤森 孝幸

（＊）参加後に体調を崩されたため、本報告書にはレポートを掲載しておりませんが、
熱心に参加してくれました。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

◆長沼俊幸様（閖上中央自治会会長、元・名取市愛島東部団地仮設住宅自治会役員）

◆藤間千尋様、高橋正子様、福田貴文様（公益社団法人3.11みらいサポート）

◆佐藤美香様（日和幼稚園遺族有志の会）

◆武内宏之様（元・石巻日日新聞報道部長、石巻市芸術文化振興財団理事）

◆丹野祐子様（一般社団法人閖上の記憶代表理事）

◆佐藤司様、今田和人様（尚絅学院大学）

◆其田雅美様（東北学院大学）

◆岡藤健太様（株式会社近畿日本ツーリスト首都圏 千葉教育旅行支店）

◆松本美里様（あすか交通株式会社）

◆ルートインジャパン株式会社 様

◆米屋株式会社 様

◆株式会社学生情報センター 東日本学校法人営業部 様

◆医療法人社団綾和会 間中病院 PCR センター 様

◆名取市サポートセンター どっと.なとり 様

◆特定非営利活動法人こころの森 様

なお今回の観光バス運行にあたり、「千葉市観光バス活用促進事業」の助成を受けました。

敬愛大学 震災学習スタディツアー2022 活動報告書

令和5年1月31日 発行

発行人　藤森孝幸

発行所　敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

電話 043-251-6364（直）　ファックス 043-284-2261（直）

今年度参加した学生たち。石巻市南浜町に震災直後から設置されている「がんばろう！ 石巻」看板の前で撮影しました。
大きな被害に見舞われたこの地で、本学が時間をかけて立ち寄り、現地踏査を行ったのは、初めてのことです。
本学からこれまで参加したのべ320名を超える学生たちと共に、これからも「語り継ぎ」を続けてまいります。

UD FONT 本冊子には、見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。